古代アクセントから近代アクセントへ

金田一春彦

これは、今年春の京都での研究発表会で報告した内容を整理したものです。増訂してありますが、趣旨は変っていません。全文の大意は、二九々に要約してあります。

一

谷崎潤一郎の戯曲「鶺姫」の中に、国語の一教師が平安時代の人に生まれ変るところがあるが、今、現代の人がそのようにひとりだけ平安時代に生まれ変ったとする。と、当然、平安時代のことばを使わなければならない。その場合、その人は何にいちばん苦労するだろうか。それは、現代の我々がちがう方言をしゃべろうとする時と同じことだと思う。すなわち、語彙よりも語法が、語法よりも音韻が、音韻の中でもアクセントが、ことにマスターしにくいだろうと思う。

イハノヘニ・コザルコメヤク・コメダニモ・タゲテトホラセ・カマシシノオヂ　〔岩崎家本・皇極紀の声点の解読から(1)〕

ヤマトウタハ・**ヒト**ノココロヲ・タネ**トシ**テ・ヨロヅコトノハトゾ・ナ**レリケル**〔古今集古写本の声点の解読その他から(2)〕

右は、平安末期のアクセントを復原推定したものであるが、これは京都以外に育った私どもにはもちろんのこと、京都出身の皆さんにも覚えにくく、また、使いにくいことと思う。

なぜアクセントはマスターしにくいか。その原因は、一つはアクセントは語彙・語法とちがい、当時の文学作品類を読むというようなことでは、覚えられないことにある。が、それだけではない。例えば、「米」という語、「岩」という語は、現在京都では、**コメ・イワ**という同一のアクセントをもっているが、右の例に見えるように、平安朝時代には「米」は低低型、「岩」の方は高低型であった。ここには出ていないが、同じクラでも、「庫」は平安朝時代、低低型、「鞍」は平安朝時代、高低型である。こんな例はイヤというほどある。こういうのを一つ〳〵覚えていくことは、ずいぶん難しいことだろうと思う。現代の人は、アクセントを標識にして、よくその人の出身地を言い当てることがあるが、あれと同様に、他の点でいくら平安人に化けても、平安朝の人は、他の時代からまぎれこんで来た人を、そのアクセントによって、見事に言い当てるだろうと思う。

そうだとすると、国語史の上でアクセントの時代的変化という

ことは大いに重要視すべきことになる。すなわち、《アクセントのちがい》ということを標準として、国語史の時代区分をすることは大きな意義があると思う。

そうすると、次の問題は、《アクセントによる時代区分が実際に可能かどうか》ということである。私は、それはかなり見事にできるはずだと思う。それは、アクセントが変化する場合には、多くの語がいっぺんに同じ方向に変化し、短い期間にその変化が終ると思われるからである。もちろん、一つの語、あるいは少数の語だけが個別的に変ることもある(3)。が、同一の型に属する語が全部他の型に移ってしまうこともあることは明らかである。

どうしてそれがわかるか。それは、まず、過去のアクセントを記載した文献が、そういう事実を証明する。現在のところ、過去のアクセントを記載した文献は、京都アクセントが主なものであるが、個々の文献を見ると《現在同一の型で発音される語句は同じ型に表記されている》という傾向がきわめて強い。例えば、一九ページの語例表で㊀としてあげた語「命」「白い」「花は」というような語は、「類聚名義抄」「日本書紀の私紀」など、平安末期――鎌倉初期のアクセントを伝えていると見られる文献には、もし出て来れば、すべて平平上型に表記されている。これは、当時、すべて低低高型だったことを示す。それが「開合名目抄」「補忘記」等、室町時代――江戸初期のアクセントを伝えていると見られる文献ではすべて徴角角型に表記されている。これは高低低という型だ。そしてこれら両時代の中間の時代の文献は、すべて「名義抄」式か、「補忘記」式か、あるいは、第三の式――その式でも右の語例は同一の型で表記されている――かであると言ってよい。すなわち同じ類の語は、同じ時代には同じ型であろうとし、もし、そのうちの一つの語のアクセントが変る時には、他の語もそろって変るということが知られる(4)。

これについては不思議に思う人があるかもしれない。どうしてこれらの語が――意義も職能も関係のない語が、同じ型に属しているというだけで、一斉に同一の方向にむかって変化するのか、と。しかし、これは不思議でもなんでもない。

例えば、私はきのう汽車へ乗って東京から京都まで来た。東京駅でたまく〳〵共立女子大の山本信道さんといっしょになった。そうしたところが、私が静岡まで来ると、山本さんも静岡まで来る。私が名古屋まで来ると、山本さんも名古屋まで来る。私が京都へ着いたら山本さんも京都へ着いた……。が、これは同じ汽車へ乗った以上はアタリマエのことである。もし、これについて誰かが、よく別々の人が同じ時刻に着いたものだと感心したら、それはよほど頭がどうかしている。同じ汽車に乗っていれば、同じに着くのは当然である。アクセントも正しくこれと同じもので、「命」ということばが、イノチという型からイノチという次の型に変化したのは、「命」「白い」「花は」という語が、めいめい新しいアクセントの型に乗り換えたのではない。それらの単語が乗っていたアクセントの型それ自身が動いたのである。アクセントの型そのものが変化する以上は、その型に属している単語は、よほど特別の事情のないかぎり、みんな一斉に同じ型に変るのに不思議はない。

とにかく、アクセントにおいては、多数の語のアクセントがいっぺんに変化するということがある。そうするとアクセントの変

化は、国語の変遷の途中で、非常に重要視すべき事実だということになる。これは、かの方言の区画の原理を思わしめるものである。

すなわち、一つの言語の方言区画をしようとする場合、語毎についてその分布状態を調べると、一つ一つの語はそれぞれちがった分布領域をもっていて、等語線はメチャメチャに乱れあう。方言区画というようなことはなかなかできない。そこで、結局フランスの言語地理学が逢着したように、方言区画不可能論が生まれたりする。これに反して語法を基準としておこなうと、もう少しはっきりした区画を立てることができる。もし、音韻を基準とすれば、いっそうはっきりした区画を立てることができる。そうしてアクセントでやると、東西両アクセントの境界線は、誰がやっても、愛知県と三重県の県境付近の、《服部線》の上に引かれる。そんなわけだからアクセントのちがいを目安として方言を区画することが、方言研究の方で重んじられていることは当然である。これは、国語史の場合にもあてはめて考えてよいはずだと思う。

(1) 「皇極紀」の声点のうち、上声のものを高く、平声のものを低く読むとこうなる。名古屋大学の南不二男君は、「通らせ」の「せ」は、実は平声の軽で、トホラセェ型ではなかったかという。これはおもしろい見方である。

(2) 「やまとうた」は、寂恵本「古今集」の声点からの推定、他は「類聚名義抄」の声点その他からの推定。

(3) 例えば、次に述べる(K)の類の語の中で「思う」「動く」等四段活用動詞の一群は、近世初期以後、現在までの間に、オモウ型からオモウ型に変化している。これは、この種の語は、他の活用形への類推作用が原因となり、一般の語とはちがって、個別的な変化をしたものと考えられる。服部四郎博士の「国語諸方言のアクセント概観」(三)(「方言」一ノ四所載)ページ一四―一七を見よ。

(4) 後出の「仏遺教経」では、この類の語は、高低高型に発音されたろうと、推定されるように表記されている。

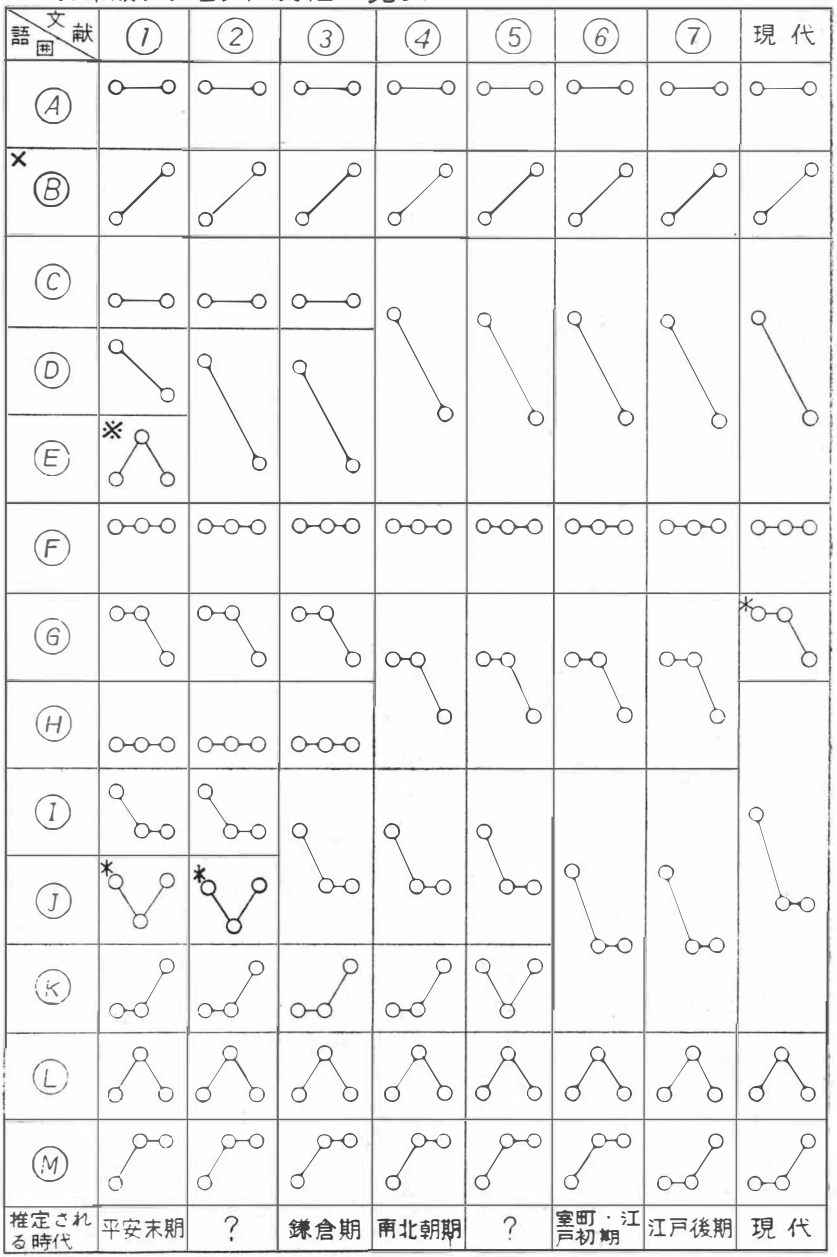
二

そこで問題は、アクセントによって国語の時代区分をやったらどのようになるかということになる。過去のアクセントの研究は現在のところ、あまり資料がそろっておらず、資料があっても、はたしてそれが何時代のアクセントを記載しているものか、なか〳〵判断しにくい。なぜならば、人は、しば〳〵自分のアクセントを観察せず、先行文献のアクセント表記をそのまゝ転載しておくからである(1)。

そこで、ここでは、文献に記載されている京都アクセントとおぼしいものを体系の異同によって分け、古いと思われるものから逐次新しいと思われるものへと順に並べるという手順をとった。こうして出来たものが次のページの【京都語アクセント変化一覧表】である。すなわち、①の文献で代表される平安末期から、現在まで、京都アクセントは、八つの時期に区画されるわけである。なおこの表について、次の一、一五、の條項に注意。

一、この表を作るに当たり、アクセントの新旧の判定は、もっぱらアクセントの内容そのものによった。つまり、記載されている文献の成立の時代に対する考慮は二の次にした。例えば、⑤の「仏遺教経」は、私の見た版本は江戸時代のものであり、本

京都語アクセント変化一覧表



文の成立時代については全然考証をしていないが、アクセントの内容から、④の次、⑥の前に置かるべきものと推定したことである。

二、この表で、Ⓐ⑬Ⓒ……は、それぞれ、アクセントから見て同じ類の語囲を表わす。各類の内容は、簡単には次の【語囲表】に示したとおりである。詳しくは、小稿「国語アクセントの史的研究」（「国語アクセントの話」所載）、「東西両アクセントのちがいが出来るまで」（「文学」二二ノ八所載）、あるいは近刊の「国語学辞典」の付録、「国語アクセント類別語彙表」等を見られたい。

三、×印の⑬の語囲は、現代では一部が、第二音節の途中で高から低へ降る型に属する。このような性格は、どの時期からあったか不明ゆえ、ここではこの問題は論じない。

四、㊀の語囲は、※印の①の時期には、第一音節が長く——つまり二音節的に、そうして、上昇的に発音されたものと推定される。詳しくは、小稿「類聚名義抄の和訓に施されたる声符に就て」（「国語学論集」所載）の一覧を乞う。

五、＊を付した①②の時期のⒿの語囲、現代の㊀の語囲は、原則として、自立語＋付属語の形である。

【時期別文献表】

①「類聚名義抄」・「日本書紀」の古写本の歌謡の声点等。
②御巫本「日本書紀私記」・浄弁本「拾遺集」の声点等。
③「四座講式」の節博士・「古今訓点抄」の声点等。
④「行阿仮名遣」のオヲの仮名遣。
⑤「仏遺教経」の節博士。
⑥「名目抄」の声点・「補忘記」の節博士等。
⑦「平家正節」の素声の譜等。

【語囲表】

Ⓐ「風」「水」その他、第一類二音節名詞。「置く」「買う」その他、第一類二音節動詞の連体形。「蚊は」「子が」その他、第一類一音節名詞＋一般一音節助詞。

Ⓑ「笠」「秋」その他、第四類・第五類二音節名詞。「取る」「見る」その他、第二類二音節動詞。形容詞「ない」「よい」。「木は」「目が」その他、第三類一音名詞＋一般一音節助詞。

Ⓒ「足」「山」その他、第三類二音節名詞。

Ⓓ「石」「川」その他、第二類二音節名詞。「日は」「葉が」その他、第二類一音節名詞＋一音節助詞。

Ⓔ形容詞の連用形「なく」「よく」。副詞「まず」「もし」等。

Ⓕ「形」「車」その他、「形」類三音節名詞。「上る」「明ける」その他、第一類三音節動詞の連体形。「風は」「水が」その他第一類二音節名詞＋一音節一般助詞。

Ⓖ「あずき」「二人」その他、「あずき」類三音節名詞。「赤い」「甘い」その他、第二類三音節形容詞の連体形。

Ⓗ「頭」「鏡」その他、「頭」類三音節名詞。

Ⓘ「力」「黄金」その他、「はたち」類三音節名詞。

Ⓙ「石は」「川が」その他、第二類二音節名詞＋一般一音節助詞。「置いて」「飛んで」その他、第一類二音節名詞＋「て」の形。

Ⓚ「命」「心」その他、「命」類三音節名詞。「白い」「高い」その他、第二類三音節形容詞。「足は」「山が」その他、第三類二音節名詞＋一般一音節助詞。

Ⓛ「かぶと」「たらい」その他「かぶと」類三音節名詞。「白

く」「高く」その他、第二類三音節形容詞の連用形。

Ⓜ「背中」「鼠」その他、「うさぎ」類三音節名詞。「歩く」「隠す」その他、「歩く」類三音節動詞の連体形。「笠は」「空が」その他、第四類二音節名詞＋一般一音節助詞。

次に、①—⑦の順に、各時期を代表する文献について註記を加えておく（ページ二四の上段まで）。

①「類聚名義抄」は、漢字字書で、著名なアクセント資料。平安末期、十二世紀の成立と推定されている。アクセントも大体そのころのものであろう。図書寮本と観智院本その他とでは体裁・内容大いに異なるが、アクセントは、いずれも声点によって記載され、しかも同種類のもの——同じ体系のアクセントをうつしたものと見てよさそう。【語例表】に掲げたⒶ—Ⓜの語例は、それぞれ次のように注記されている(2)。

Ⓐカ上ゼ上（風）・ミ上ヅ上（水）。

Ⓑア平キ上（秋）・カ平サ上（笠）・ト平ル上（取る）・ミ平ル上（見る）。

Ⓒア平シ平（足）・ヤ平マ平（山）。

Ⓓイ上シ平（石）・カ上ハ平（川）

Ⓔヨ去ク平（良く）・ナ去ク平（無く）・マ去ヅ平（先ず）・モ去シ平（若し）。

Ⓕカ上タ上チ上（形）・ク上ル上マ上（車）。

Ⓖア上ヅ上キ平（小豆）・フ上タ上ツ平（二つ）。

Ⓗア平タ平マ平（頭）・カ平ガ平ミ平（鏡）。

Ⓘチ上カ平ラ平（力）・コ上ガ平ネ平（黄金）。

Ⓙ（適当な例見当らず）

Ⓚイ平ノ平チ上（命）・コ平コ平ロ上（心）・シ平ロ平キ上（白き）・ウ平ゴ平ク上（動く）。

Ⓛカ平ブ上ト平（兜）・タ平ラ上ヒ平（盥）。

Ⓜセ平ナ上カ上（背中）・ネ平ズ上ミ上（鼠）。

右のように平・上、稀に去の声点でアクセントを示しているが、このうち、平声は原則として低い音節、時に下降的な音節を、上声は高い音節を、去声は低から高にのぼる音節を表記したものと推定される(3)。「類聚名義抄」のほかに、「世尊寺字鏡」「伊呂波字類抄」「法華経単字」「金光明最勝王経音義」などのような、同類の文献でアクセントの註記のあるものも、大体、同じ体系のアクセントを表記したものと見ることができる。やゝ種類がちがうが、岩崎家本以下の「日本書紀」の古写本の歌謡や傍訓についている声点も、これと同じ種類のアクセントと見ることができそうである(4)。次にあげる②の文献との対照上、Ⓔの例をあげ、「名義抄」の補充の意味で、Ⓙの例をあげれば、次のとおり。○○がその語である。

Ⓔ阿平珥平予去区平望平阿平羅上儞平（豈よくも非ず）。企去以上利平摩平韋上区平例平（来入り参来れ）【以上、前田家本・仁徳紀】

Ⓙ等平枳上舎上気平帝上（解き放けて）【図書寮本・允恭紀】

伊平賚平甫上流平柯上枳平底上（五百ふるかきて）【前田家本・雄略紀】

「類聚名義抄」とちがう点は、Ⓔの類、Ⓚの類の動詞の終止形命令形等が平上型・平平上型ではなくて、平平型・平平平型になっている点である。南不二男君は、この平平型・平平平型の最後の平は平声の軽の意味で、すなわち全体は低高低型を表わ

したのだろうと推定した(5)。この見方に従えば、「名義抄」と同じ体系のアクセントを表記したものと解釈できる。

②日本書紀の私記。古写本にはいずれも声点が施されているが、御巫本のものが一番正確らしい。これらについては、大原孝道氏その他の研究がある(6)。一斑をあげれば、次のとおり。

㋕油上岐平弖上美上与平(行きて見よ)。女上乃上古平爾上之上弖平(女の子にして)。

㋖宇上倍平爾上太平知上万上志平天上(上に立ちまして)。安平女上乃平志上太平爾上(天の下に)。古上礼上爾上与上利平弖上(之によりて)。油上岐平弖上美上与平(行きて見よ)

浄弁本「拾遺集」は鎌倉・室町両期の境のころの写本。声点については築島裕君の研究(7)があり、その例は次のとおり。

㋕よ上く平みて上き平。(よく見てき)。

㋖い上り平て上も平つ上く上し平て上も平(入りてもーー)。

これらの文献の声点は、「名義抄」「日本書紀歌謡」のそれとよく似ているが、去声の点のない点が異なる。「名義抄」で去声の音節は、この二つの文献では上声になっている。表の㋕の例は、これを反映する。これは表記法がちがったからともとれるが、アクセントそのものが時代的に変ったからと解釈する。右のほか「古今集」の古写本の中に、声点をさしたものがたくさんあるが(8)、大体これらと同じ時期のアクセントを表記したものと見られる。

③「四座講式」は、明恵上人(貞永元年、六〇才で示寂)の作と伝える講式で、真言宗では、今でも、涅槃会の時などに朗唱する。各種の譜本が現在し、最も古いものは正平年間の奥書がある(9)。若き日の服部四郎博士が高野山へこもって写されたノートから引用すれば、次のとおりで、ヤマトコトバの部分には多く徴・角という譜でメロディーがつけられている(10)。

㋒哀上恋平ノ角イ角ロ角ヲ徴フクミ(色を含み)。ミ徴ヅ徴カ徴角ラ角カ角ミ角ヲ徴ヌ徴ク徴モ徴角ノ角ア角リ角(自ら髪を抜くものあり)。

㋓最去後平ノオ角モ角ヒ角ヲ徴ナ徴角シ角キ角(思いをなしき)苦平悩平ノコ角ト角バ角ヲ徴ト徴角ナ角フ角(言葉を唱う)。

㋗カ徴ハ徴角ヲ角ワ角タ角ツ角テ徴角(川を渡って)。ツ角ギ徴角ニ角啓上白ヲ角イ角タ角ス角ニ徴角(次に一致すに)。ツ徴ゲ徴角テ角ノ徴玉徴角ハ角ク角(告げて宣わく)。テ徴角ヲ徴ア徴ゲ徴角テ角(手を挙げて)。

元来、「徴」は、製洋音楽でいう $\overset{\text{so}}{\text{ド}}$ のようなもの、「角」は $\overset{\text{re}}{\text{ミ}}$ のようなものである。そうすると「徴」は、この譜をつけた当時高く、「角」は低く唱えるべき音だったと推定される(11)。だとすると、この旋律に反映してアクセントは、

㋒イロ(色)、カミ(髪)。㋓オモヒ(思ひ)。コトバ(言葉)。㋗カハヲ(川を)、ツギニ(次に)・ツゲテ(告げて)、アゲテ(挙げて)

のようになる。

右のうち、㋗の条の語に関しては、②の文献とは異り、次の④の文献と一致する。すなわちここに反映しているアクセントは②の時期から一つ進んだ時期のアクセントと推定される。たゞし、㋒の語、㋓の語においては、④の文献とは異り、②の文

献に一致する。

次に、「古今訓点抄」（嘉元三年の奥書あり）は、古今集から語句を抄出して声点を施した文献であるが、その声点によって示されるアクセントは、大体「四座講式」のものと一致する(12)。用例は、次に示すとおり。

(ハ)シ平モ平ハ上ヲ上カ上ナ平ム上（霜は置かなん）。コ平ヒ平ヲ上シ上コ平ヒ上ハ（恋をし恋いば）。

(ホ)チ上リ上ノ上マ平ガ平ヒ平ニ平（塵の紛いに）。ワ平ラ平ビ平（蕨）。

(ト)カ上ヂ平ニ平ア上タ上ル上（槻に当る）。ト上バ平ニ平アヒミム（永久に相見ん）。コエヲホニア上ゲ平テ平（声をほに挙げて）。イ上キ上ウ上シ上ト平イ上ヒ平テ平（生き憂しと言いて）。

右の(ハ)の「霜」「恋」、(ホ)の「紛い」「蕨」、(ト)の「槻に」「永久に」「上げて」「言ひて」のアクセント、いずれも、「四座講式」の曲節に反映したアクセントと同時期のものに相違ない。

また、北野克氏の教示に従えば、国語辞書「名語記」（文永五年に一部出来、建治元年に完成）に記載されているアクセントも、④の文献と一致せず　②の文献と一致するらしい。

④行阿仮名遣。いわゆる定家仮名遣のキャノン。大野晋氏の研究が出ている(12)。貞治元年（行阿はこの時おそらく七〇才以上だったらしい）以後の成立だろうという。大野氏は、この文献で、その語のその音節が高く発音されるか低く発音されるかによって、「お」と「を」の仮名が使い分けられていることを指摘された。それによると、次のように、以前の文献で、低く発音されていた音節のうち、(ハ)の語の第一音節、(ホ)の語の第一音節は、高い発音を表わすべき「を」で表記されており、(ト)の語の第一音節は低い発音を表わすべき「お」で表記されている。

(ハ)を(鬼)。をや(親)。(ホ)をこり(発り)。をよび(及び)。(ト)おしむ(惜しむ)。おさむ(治む)。おもふ(思ふ)。おほし（多し）。

すなわち、行阿の時代には、(ハ)(ホ)の語の第一音節は、②の時代とちがって高くなっていた。これに対して(ト)の語の第一音節はまだ、②の時代と同様に低かった、⑤の時期のように高くはなかったと推定される。

⑤仏遺教経。今禅宗で用いられる経文で、いくつかの版本があるらしい。元来、高僧・鳩摩羅什がシナ語に訳したもので、今訓読して誦する。訓は、誰がつけたかわからぬが、明恵上人がこれを読んだというから、鎌倉時代には訓読されていたものと思われる。刊行の譜本（刊記はないが江戸時代らしいもの）を見ると、そこに出てくるヤマトコトバに、次のように徴と、角の譜がついている。「四座講式」と同じように、徴は高い音節、角は低い音節を表わすものととれる。

(ト)ハ徴チ徴ノ徴ハ徴ナ角ヲ徴ト角ル徴ニ徴（蜂の花を取るに）

ナン徴角ヂ徴ガ徴コ徴コ角ロ徴ヲ徴拆徴伏徴角ス徴（汝が心を――）。悪徴病徴角ヲ徴ノ徴ゾ角ク徴ガ徴ゴ徴ト角シ商（除くが如し）。

ここに反映しているアクセントについては、桜井茂治君が研究を進めているが、(ト)の語に、徴角徴という譜がついていて、これは当時、これらの語が高低高というアクセントをもっていた

とを反映しているかを思わせる。そうすると、これに反映しているアクセントは、④の文献と⑥の文献との中間の時期のものと推定される。

⑥名目抄。「新校・群書類従」の雑の部に出ている。洞院実煕（応永十六年の生れ）の著。平上去の声点を差して、アクセントを示しているが、その声点を解読すると、次の「補忘記」と同じ体系と推定されるアクセントを表記している。

Ⓚカ上ン上ガ平ヘ平タ上ダ平ス平（考えくだす）。
オ上ホ平ク平チ平（大口袴）。ヲ上ニ上ノ平マ平（鬼の間）。
Ⓜノ去ザ上キ上（荷前）。ア去コ上メ上（粕）。

右のうち平声・去声の点は低い音節を、上声は高い音節を表わしたものと推定される(13)。だとすると、Ⓚの語の第三音節が低になっているのは、⑤の文献から変化したあとを示しており、次の「大口」の第三・第四音節、「鬼の間」の第四音節が低になっているのも、これに準じる。Ⓜの語が低高高型になっているのは、次の⑦の文献とのちがいを表わす。

「補忘記」は、よく知られたアクセント資料で、貞享版と元禄版の二種がある。観応の著で、元禄版の凡例により、京都アクセントを表記したものと見られる。節博士の徴と角とでアクセントを表記してあり、実例は次のごとくで、徴は高い音節を、角は低い音節を表わしたものである。

Ⓚア徴シ角ヲ角（足を）。ク徴ラ角ヲ角（庫を）。イ徴ノ角チ角（命）。コ徴コ角ロ角（心）。セ徴バ角キ角（狭き）。ツ徴ヨ角キ角（強き）。
Ⓜト角ガ徴ヲ徴（答を）。ナ角ニ以ヲ徴（何を）。セ角ナ徴カ徴（背中）。カ角ク徴ス徴（隠す）。

これらの例によれば、Ⓚの語は、⑤の文献と異り、高低低型になっている。一方、Ⓜの語は、次の⑦の文献とは異なり、⑤以前と同じく低高高型である。

「補忘記」と似た文献に「開合名目抄」（刊行年代不明）があり、同じ体系と見られるアクセントを表記している。

⑦「平家正節」の素声（シラゲ）の段。「平家正節」は、前田流平曲の譜本。荻野検校の著で、安永五年（1776）の序と跋がある。各種類の大旋律型を通じて精密な節譜がついているが、中で注意すべきは、語られる部分――歌劇ならばレシタティーヴに当る部分――すなわち素声と呼ばれる部分の譜である(15)。この部分には、次に示すように、無譜の文字にまじって、まゝ上という譜を記した文字がある。

Ⓜけふは上うづ上きひ上とひ（今日は卯月一日）【厳島遷幸】
く上び上がみには上りを上さし（首がみに針を挿し）【補忘】
Ⓒ㊁よいか上た上きにあふてこ上そ（よい敵に逢うてこそ）【木曾最後】
お上の上れ上は上を上ん上なれば（己は女なれば）【木曾最後】

館山漸之進翁の「平家音楽史」に従えば、上の譜はその文字を高く唱えるというしるしで、それは京都の言葉のアクセントによったと伝えているという(15)。

今、それをたどってみると、Ⓜの語は第三音節だけに上の譜がある。第二音節には上の譜がない。これは当時の京都アクセントは低低高型だったからだと見られる(16)。だとすると、これ

は「名義抄」から「補忘記」に至るすべての文献から推定されるアクセントとは異り、今の京都のアクセントと同じであることが知られる。たゞし、今の京都とちがう点もある。㊀㊁の語がそれで、「敵」「女」の第一音節・第二音節両方に上の譜がついている。現代ではこれらはカタキ・オンナの型に属する。この語は、「正節」の出来た安永年間には、近世初期と同じように、まだ、高高低型だったことを表わすものと思う。

(1) 具体的な例については、小稿「契沖の仮名遣書所載の国語アクセント」(「国語と国文学」昭和十八年四月号所載)のページ三〇六―三〇七を参照。

(2) 印刷の都合上、例えば、本文にアキとあるのはア平キ上と転写し、ヨクとあるのはヨ去ク平と転写した。以後声点をさした文献の引用はすべてこれに準じる。

(3) 「類聚名義抄」で平声が確実に下降調の音節を表わしたろうと推定されるのは一音節の語の一部(例、「日」「矢」等)と、それに準じる語(例、「して」の「し」)である。それ以外は、低平調の音節を表わしたと推定される。

(4) 大原孝道氏は、昭和十九年の日本音声学協会の例会で、「日本書紀の古写本に見えるアクセント」という題のもとに、「日本書紀」の傍訓の声点と、歌謡の声点とで、多少性格がちがうことを指摘報告されたことがある。注意すべき警告であるが、後述の南君の考えに従えば、同一のアクセント体系を記述したものと見ることができるので、ここにはそのちがいは問題にしなかった。

(5) 南君は名大文学部出身の俊秀で、その研究の成果は適当な機会に公開されるはずである。

(6) 大原氏のものは、(4)の条に紹介した発表のほかに、「近幾アクセント下上型名詞の甲・乙類の別の発生に関する考察」(「国語アクセント論叢」所載)がある。その他、浜田啓介君は昭和二十五年度の京大文学部の国語学の単位レポートで私記の声点についての考察を行い、水田紀久君は最近国史大系本の私記の声句を集めて謄写版で出版された。

(7) 「国語アクセント論叢」所載の「浄弁本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」がそれである。

(8) 例えば「寂恵本」など。古今集の古写本の声点については早大国文学科出身の秋永一枝君が克明に研究を続けている。

(9) 私の所持する版本だけでも、明暦本・貞享本・宝暦本・大正本・昭和本二種、計六種があり、服部博士所持の版本に元禄本がある。これらは、その譜を比較すると、少しずつ異なり、かならずしも正平本が最も古いメロディーを伝えているとは判定しにくい点がある。が、一般に後世のものほど、新たに修飾された小旋律型を多く有し、古いものほど簡単なメロディーをもっているとは言える。

(10) 原文では、平上去入は、漢字の四隅に声点によって示され、角徴の譜は和訓の右側に節博士によって示されている。印刷の都合上本文のような体裁に改めた。

(11) この講式の現行のメロディーは、岩原諦信師の「声明の研究」および「四座講式並大師明神両講式伝習手引」の中に、きわめて具体的に解説されている。現行の曲節では、正平本の

徴の一部は徴のカヽリという小旋律型に変り、後世の変化を示している。Ⓒの「かは」の「は」や、「つぎ」の「ぎ」などに付せられている徴角という小旋律型は、恐らく古くは単純な角という小旋律型をもっていたものであろう。声楽が語り伝えられる時には、《高音のすぐ次の低音は、その音の全体、あるいは前半のみが高音に変化する》ということが、しばゝ見られる。逆に《低音のすぐ次の高音は、変化してその音の全体、あるいは前半のみが低音に変化する》これらは《旋律変化の法則》ともいうべきものであろう。なお、小稿「日本四声古義」〔国語アクセント論叢所載〕の第五節を参照いただければ幸甚である。

(12) 「国語と国文学」昭和二十五年十二月号所載の「仮名遣の起源について」がそれである。

(13) 平上去の声点で語句のアクセントを示しているが、その示し方は「類聚名義抄」などとは少しちがう。去声の点は第一音節にのみ現れ、しかもその場合は第二音節は必ず上声である。一方平声の点は第一音節には決して現れぬ。思うに、著者は、低い音節のうち、第一音節のものを去声で示し、第二音節以下のものを平声で示したのにちがいない。

(14) 平曲の大旋律型の種類とその特色については、小稿「前田流平曲のメロディーについて」〔日本文学研究」昭和二十七年三・四月号所載〕および平凡社刊「世界音楽辞典」の「平曲」の条に述べた。大旋律型の種類により、アクセントの反映のし方はまちゝで、素声および口説(クドキ)と称せられる大旋律型は、大体⑦の時期のアクセントを忠実に反映しており、指声(サンゴエ)・折声と称せられる大旋律型は、むしろ⑥の時期のアクセントを反映している。これは指声・折声は、素声・口説に比して、より音楽的な部分であるために、前代からの伝統を、より忠実に守っているためと思われる。なお、現在の舘山甲午氏の平曲において、口説・指声・折声の部分の旋律は、正節の譜に対してきわめて忠実である。

(15) 「平家音楽史」のページ八二四を参照。たゞし、現在の舘山氏は、素声の部分に限り、正節の譜からはなれた自由な旋律で誦しておられる。

(16) これは現代の京都語と同様である。たゞし、平曲の素声の旋律によれば、四音節語で現在低低高型の語(例、「雀が」「空色」等)は、当時低低高高型だったらしい。三音節語の低起式平板型が低低高型であり、四音節語のそれが低低高高型だということは、現在、和歌山県日高郡竜神村のアクセントに見られる性格である。すなわち、元禄期の京都アクセントが高知・田辺式だと言えると同様、安永期の京都アクセントは「竜神式」だと言える。最近、竹岡正夫氏が本誌第二十一輯に宮士谷成章が「稿本あゆひ抄」(明和四年―安永二年の間に成立)の中でおこなったアクセントに関する考察を紹介されたが、それによると、成章は、「すすき」という語を低低高型に、「かりがね」という語を低低高高型に表記している。平曲の旋律と成章の記述の両方から考えて、明和・安永ごろの京都アクセントが「竜神式」の体系をもっていたことは、ほゞ確実である。

三

京都アクセントは、大体、平安末期以後、ページ一八の【アクセント変化一覧表】のような変化を遂げて、現在に至ったものと考えられる。次の問題は、これらの各時期の間で、どの時期から、どの時期へ移る変化が、大きなアクセント変化であったかということである。

右の表を見て、すぐに知られることは、時代が後になればなるほど、型の種類が少くなっていることである。これは①の時期と現代とを比べてみれば明らかである。即ち、京都アクセントはまず型の量において変化を遂げたと考えられる。が、京都アクセントの変化は、このような「量」の問題だけでない。型の質においても変化をしている。これについて述べよう。

今、①②の時期のアクセントの型を見てみると、高い音節と低い音節とのあらゆる組合せが可能である。例えば三音節語の型には、$2^3=8$ 種類の型がある。ところが現代では、高い音節と低い音節との組合わせに制限がある。現代の型のうち、＊をつけた高高低の型は、**ハナ**モ(鼻も)・**ウシ**ェ(牛へ)というような連語にだけ現れる型である。だからこれは特別の型として除く。そうすると残るのは、**高高高型**、**高低低型**、**低高低型**、**低低高型**である。これらの型は、その高低の配置からみると、(1)すべて高い音節ばかりから出来ているか、それとも、(2)一つの音節だけ高いか、のいずれかである。①②の時期のアクセントは、もし、服部四郎博士の術語を使うならば、《各モーラが高または低のトネームを有するアクセント》である(1)。

K. L. Pike の "Tone Language" によれば、メキシコのアメリカインデアンの言語には、こういうアクセント体系をもったものが、たくさんあるらしい(2)。これに対して、現代京都のアクセントは、《どこを高く発音するということ——逆にどこを低く発音するかでも悪くない——が、特に重要な意味をもつアクセント》である(3)。これは古代のギリシャ語やラテン語のアクセントとして知られているものにむしろ似ている。そうすると、京都のアクセントは、平安末期以後、現代に至る間に《メキシコ型からギリシャ型へ》という変化の道をたどって来たものと言える。

今、かりにメキシコ型とギリシャ型と呼んだが、これは、世界の高低アクセントにおける二つの対立するタイプである(4)。このちがいは、たゞ外形の上のちがいだけではない。もっと大きく、その機能の上にもちがいが見られる。すなわち、メキシコ型のアクセントの方は、型の区別が豊富であるところから、アクセントが語の意義の区別に役立つことが大きい(5)。が、他方、アクセントが語としてまとまりを示す力は、弱いと言わざるを得ない。ギリシャ型の方は、アクセントが語の意義の区別に役立つことは少い。が、それに対して、一語について高いところは一か所だけというところから、一語としてのまとまりを示す働きは、大きいと言える。そうすると、京都のアクセントが、メキシコ型からギリシャ型に移ったということは、アクセントの機能のうち、語の意義の区別を表わすという方は、これは段々音韻の方にゆずり、一語・一語にまとまりを与えるという機能、それを発揮する方向に進んで来たものと言える。これが、京都アクセントの変遷における大きな傾向である。

さて、アクセントの変遷は大体その方向を進んでいるとする。次の問題は、ではメキシコ型からギリシャ型への移行は、いつ、

どのようにして、行われたかということである。もう一度、【アクセント変化一覧表】を見ていただくと——

まず、①②②の時期、この時にはあまり大きな変化はしなかった。①の時期から②の時期へ——この時には、㋐の語圏の第一音節が短くなった。そのために多少アクセントにも変化が起った。がたいしたことはない。これは音韻史の上の変化がアクセントに影響を与えたものである(6)。②の時期から③の時期へ——ここでは、㋑の語のアクセントが変化した。が、これはこれまで自立的な性格をもっていた助辞の類が、完全に附属語的な性格になったために、アクセントの上にもちょっとした変化が起ったにすぎない。これは、文法史上の変化が、アクセントに影響を与えたものである(7)。

次に④の時期は、②の時期に比べて、㋒㋓という二つの型が消滅している。これは、かなりの変化である。すなわち、この時期には、低ばかりの型というのがなくなった。つまり、高低のあらゆる組合せに制限が出来たわけである。これは、《メキシコ型アクセントの崩壊が初まった時期》と言わなければならない。次の⑤の時期には㋔の語に変化が起っている。これは最初の低い音節が高い音節に変ったのであって、これは④の時期に起った変化と同じ種類の変化——そのつゞきだと言える。次の⑤の時期から⑥の時期への変化は、発話において同じような音調に実現する型を整理したもので(8)、こゝで京都アクセントは一往安定した体系になった。つまり、③の時期のアクセント体系は、④⑤という過渡期を経て、⑥という新しい時期に入った観がある。

今、この⑥の時期のアクセント体系を検討してみると、高い音節の来る位置、低い音節の来る位置に制限がある点で、メキシコ型ではない。それでは、現代京都のような、どこか高いところが特に重要な意味をもつアクセント体系かというと、そうでもない。今、㋑の型は、第一音節の高い型である。そこでこれを《第一音節の高い型》と呼ぶことにする。と、㋕の型を呼ぶのに困る。これを《第二音節の高い型》と呼ぶと、㋑の型の呼び名がなくなる。つまり、この⑥の時期のアクセント体系の各型を呼ぶには、どこが高いかだけではいけない。すなわち和田実氏が試みられたように、(1)はじまりが高いか低いかということ、と、(2)どこで高から低へ下るかということ、と二元的に呼ばなければいけない。すなわち、和田氏にならえば、㋕の語圏は、《高くはじまって第三音節が降る型》、㋕の語圏は《低くはじまって第三音節が降る型》というようなわけである(9)。

⑥の時期のアクセント体系は、このような二元的な方法ではじめて解釈でき、そういうアクセントである。これは、①②のようなメキシコ型ともちがう。現代のようなギリシャ型でもない。その中間のものである。即ち、⑥の時期は、①②の時期から⑧の現代に至る、ちょうど中間の段階にあるアクセント、いわば《メキシコ型・ギリシャ型中間型のアクセント》ということになる。

次の⑦の時期になると、㋗の語圏が高いところが一ヶ所だけになっている。これはもう一歩ギリシャ型に近づいたことになる。たゞし、㋕の語圏が、まだ、二音節高いところのある型であって以前の姿をとゞめている。そうすると、⑦の時期は、⑥の時期から現代に移る過渡期だと言える。

以上述べたことを要約すれば、①②③の時期から④⑤の時期を

経て⑥の時期に移る間に、京都アクセントは大きな変化を遂げ、次に⑥の時期から(7)の時期を経て現代に至る間に、また顕著な変化を遂げたと言うべきである(10)。

(1) 「国語アクセント論叢」所載の「原始日本語のアクセント」のページ二三を見よ。

(2) "Tone Language" によると、メキシコのインデアン語のうちで Mixteco 語は、各モーラが高中低の大体いずれにも成り得るという。ページ五の註8によれば、Matlazinco 語というのは、高低二個のトネームから出来ており、各モーラにそのいずれをも取り得るアクセントを有するらしい。平安末期の京都アクセントは、大体このあたりのものによく似ていそうである。

(3) 現代京都語には、全平型もあるし、また、四音節以上の語には、高高低低型、高高高低型もあるから、どの音節が高くなるかだけでは型は決定しない。が、平安末期のアクセントに比べれば、どの音節を高めるかということは、重要な意味をもつと言ってよい。服部博士の術語で表現すれば、《「音節アクセント」ではなく、「単語アクセント」である》ということになる。

(4) 「メキシコ型」・「ギリシャ型」ともに、名称として不適当だというそしりを受けそうであるが、この席だけということにしてお許しを乞う。この発表の中で、何か短い名称がないとどうも不便である。

(5) Pike によればメキシコ・インデアン語の一種 Mazateco 語は、四段階の高低トネームから成立するアクセントを有し、例えば、site という音韻は、アクセントのちがいにより、「私はつむぐ(だろう)」「彼はつむぐ」「彼はつむぐだろう」「我々はみなつむぐだろう」など十二種類のちがった意味を表わし分けるという ("Tone Language のページ二三)。

(6) この問題については、かつて「言語民俗論叢」所載の「国語アクセント史の研究が何に役立つか」の第二節で考察した。

(7) これについては、(6)と同じ論文の第三節で言及した。

(8) 高低高型は、断定を表わすイントネーションを伴って用いられると、高低低調に近く発音されたであろう。他方、高低低型は、間掛けのイントネーションを伴うような場合などには、高低高調にも発音されたであろう。

(9) この考えは「季刊国語」第二号所載の、氏の「アクセント・型・表記法」に見える。服部四郎博士が「音声学」のページ一九三―一九四に提出しておられる見方も、これと似て見える。

(10) 私は、前述「国語アクセント史の研究が――」において⑥の時期から現代へのアクセント変化を論ずる時に、高高低型〈高低低型の変化よりも、低高高型〉低低高型の変化の方を重要視したが、服部博士の「音韻論から見た国語アクセント」(「国語研究」第二号所載)によって訂正する。

四

以上は、もっぱら、ページ一八の表の上で、京都アクセントの変遷を考えたのであるが、これを実際の時代にあてはめてみると

どうなるか。表には、①—⑦の文献が表わすと推定される時代を最下欄にあげておいた。この時代の名は、もっと研究が進めば訂正されるかもしれない。が、今は右の程度に考えておく。

このように考えておいて、まず、平安末期から鎌倉期に至る時期は、前節に述べたメキシコ型アクセントの時代である。これは《古代アクセント時代》と呼んでよかろう。それが、南北朝時代という過渡期を経て室町時代に入り、古代・近代中間の、いわば《中世アクセント時代》になった。これが江戸初期まで続く。そうして、その後江戸後期にまた新たな変化が起って、現代のギリシャ型アクセントになり、《近代アクセントの誕生》ということになった。

たゞし、こうは言うものの、現代の京都アクセントは、ギリシャ語のアクセントにそっくりなのではない。現在の諸方言のうちでは、鹿児島方言や、青森方言のようなのこそ、ほんとうのギリシャ型というべきものである(1)。現代の京都語には高高型、高高高型というような、古代ギリシャ語にはない型が存在する。また、三音節語にこそ、高高低型というような型はないが、四音節語には高高低低型、高高高低型というような型もある。現代の京都アクセントを目してギリシャ型になったというのは、その点で言い過ぎである。が、平安末期以来、ギリシャ型へ向って変化を続けて来たとは言えると思う。そうして、この傾向は、今後も引き続いて進んで行くだろうと推測する。

いずれにせよ、以上を総括すれば、こうなる。

平安末期以後、京都語のアクセントには、大きな転機が二度あった。一つは、南北朝時代、もう一つは江戸後期である。そうして、アクセントの性格そのものは、語義の区別に役立つメキシコ型アクセントから、一語のまとまりを示す、ギリシャ型アクセントへの脱皮を遂げて来た

と考えられる。

もし、《アクセントの変遷を国語史の上に非常に重要視せよ》という私の主張が正しいならば、これが日本語の変遷の大きな姿である。

(1) この両方言は、一語のうちのどこか一音節が必ず高く、しかもその高い音節は一音節に限る。鹿児島方言については平山輝男氏の「九州方言音調の研究」を参照。青森方言は芳賀綏君の研究による。——名古屋大学助教授——